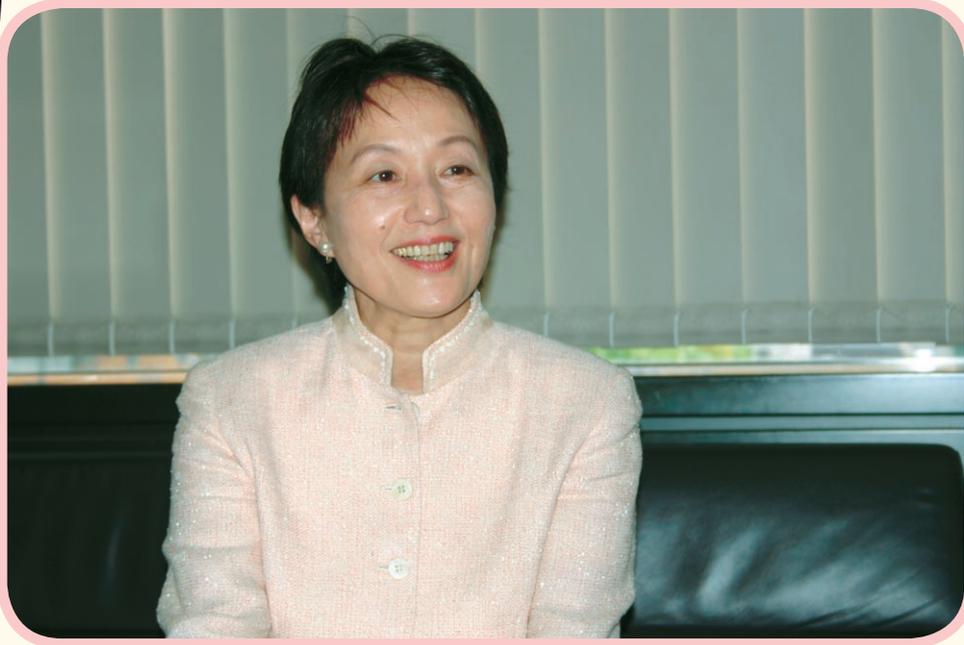


ことばに乗せて、



NHKアナウンス室長

やまねもとよ
山根基世

●「相手のところを開くことば」

鶴岡 本日は、お忙しいところ最高裁判所においでいただき、ありがとうございます。山根さんは、NHKアナウンサーとして対談番組などでご活躍され、また、「ことば」に関するエッセイ集を出版していらっしゃると思います。本日は、「ことば」を扱うプロとしてのいろいろなお話を伺いたいと思っております。

山根 よろしくお願ひします。

鶴岡 これまで数多くの方々と対談をされてきたと思いますが、どのように相手の方に心を開いていただいたのですか。ずいぶんと工夫を重ねてこられたのではありませんか。

山根 一粒飲めば効くような特効薬みたいなものはありませんね。ケースバイケースで、誠心誠意、相手に向かっていくし

かありません。また、人間誰しも「自尊心」という名の一匹の虫を胸に飼っています。その虫を傷つけないでどう扱うかというのが大切であると思っています。

鶴岡 それは、家庭裁判所調査官の面接にも言えることですね。家庭裁判所調査官は、心理学、教育学等の専門性を活かして、離婚や相続等を扱う家事事件の当事者や非行を犯した少年と面接をし、その内容を裁判官に伝えるということを主な仕事としています。家庭裁判所調査官は、その人の心は本当のところはどうかという一番大事なことを引き出すために、当事者や少年、その被害者と誠実に真剣に向き合い、また、相手の人格を尊重しつつ、話を聴くようにしています。

山根 家庭裁判所調査官というのは、裁判官の判断材料を収集するというインタ

こころを届ける



最高裁判所事務総局家庭審議官

つる おか けん い ち
鶴岡健一

ビューの専門家なのですね。アナウンサーのインタビューも、自分を出すのではなく、相手の方が本当に自由に話していただけるように、一番いいところを引き出せるようなインタビューを心掛けるというのが特徴ですから、そういうところは共通していますね。

ところで、テレビや新聞で報道されているような重大な事件を犯した少年と面接されるときは、どのようなことを大事にしていらっしゃるのですか。

鶴岡 基本的には、どんな少年と会うときでも、その少年の心に何が住んでいるかを見つけることが第一ですが、特に重大な事件を犯した少年について、その核心に触れていくことは大変難しいように思います。聞いてほしくないことや、自分でもよくわかっていないことを聴く必要

があるわけですから、まず、事実を細かく聞いています。その少年の悪い点も、良い点も、トータルに事実を聴いていきます。そうすることによって、少年に自分自身を再構築させ、さらに、自分の気持ちや自分の問題点を言語化させ、それを反省につなげていくんです。こうしたプロセスを通じて、少年が被害者の痛みをきちんと受け止められるようになっていくと思っています。

山根 これは比較にならないかもしれませんが、私たちも美術番組でアーティストの方にインタビューをするのですが、そもそも美とか、アートというのは言葉にならないから、作品にしようとしているわけですよね。でも、そこを何とか言葉にさせていただかないと、私たちの番組は成立しませんから、何とか言語化して

いただけるように手を代え品を代え話を聴いていくわけです。すると、中にはそんな言葉にならないからこうやってるんだと怒る人もいますけれど、話し終わると、今までの自分をもう一回整理することができて、またここから新しく出発できるような気がするとおっしゃる方も大勢いらっしゃるんです。自分の中に漂っていて、言葉にならないものを言語化する作業は、一人では苦痛で、なかなかできない作業だということなんでしょうね。

鶴岡 そうですね。誰かが聴いてくれないとできないし、大変な作業ですね。ただ、それだけに得るものは大きいように思います。私たちと会ったこと、話したことが、少年にとって意味があるようにと、いつも願っております。先ほど、手を代え、品を代え話を聴くとおっしゃいましたけれど、何かコツのようなものはあるんでしょうか。

山根 抽象的な質問では、大雑把な答えしか返ってこないような気がしますから、一つ一つ具体的な質問をしていく、ディテールの積み重ねだと思います。それによって、その場で、自分の中を探り直して、今の自分を表現する言葉を再構築しなければならない状況に相手を追い込んでしまうということではないでしょうか。



「椿咲く丘」像前



大ホール

●「専門職から総合職へ」

鶴岡 インタビュー以外にも、番組の構成や企画に携わった経験もありだと伺っていますが。

山根 そうですね。NHKスペシャルやE TV特集、ラジオ深夜便のインタビュー番組などを制作しました。アナウンサーの仕事の基本は、アナウンスメントの専門性といわれる、読むこと、インタビュー、司会、中継です。最近は、これにプラスして、番組とは何か、どこを目指していけばいいのか、どういう組み立てにすれば視聴者に分かりやすいのか、視聴者にとって面白いのはどういう情報かを分かっていることが求められています。私は、これを「番組力」と呼んでいます。アナウンスメント力と番組力、この二つのどちらが欠けても、アナウンサーとしては成立しない時代になっていますね。

鶴岡 時代とともにアナウンサー像も変わってきたということでしょうか。

山根 かつてのアナウンサー集団の中には、アナウンスのことだけしか分からない偏った人もいて、専門性の部分では非常に高いものを持っていても、全体像を見るのが苦手な人もいました。今では、アナウンスの専門性にプラスして、ジャーナリスティックなセンスや番組的なセンスも持たなければならない時代になりましたから、ハードルが高くなっています。

鶴岡 家庭裁判所調査官にも、かつては例えば少年事件にかかると少年のこしとか頭になくて、その事件が周囲に与えた影響とかそういうことにはあまり目を向けず、とにかく少年のためにとということに重きを置いた人もいたんです。しかし、今はバランスよく全体を見ながら事件を担当するという意識に変わってきています。そして、裁判所全体としてどういう取組みをしていくべきかを考えて、自らいろいろな企画・発案をし、積極的に新しい仕組み作りにも取り組んでいます。家庭裁判所調査官の仕事も、個々の事件を調査して報告書を書くだけではなくなってきたり、随分広がりが出てきたように思います。

山根 そういう意味で専門職というのは時代とともに同じような足取りをたどるものなんですね。

鶴岡 今はどんな専門職でも総合力あるいは組織感覚というのを持たないと本当の専門家とは言えなくなってきたのではないのでしょうか。

●「ことばは体験から」

鶴岡 先日、NHK「クローズアップ現代」で「脳科学で防ぐキレル子」という番組を拝見いたしました。最新の脳科学の研究によれば、「キレル子ども」を防ぐためには、子どもの感情を生み出す「アクセル」となる扁桃体をちゃんと成熟させて活性化した上で、感情を制御する「ブレーキ」の役割を担う前頭前野を刺激しなければいけないようですね。

山根 番組をみていただき、ありがとうございます。人と人とが触れあうコミュニケーションの実体験によって感情制御能力を高めるという話でしたね。少年事件を扱っている立場から、このようなコミュニケーションについてどのようにお考えですか。

鶴岡 家族間、親子間におけるコミュニケー



ションが十分にとれていないという事案をよく聞きますが、このコミュニケーションの減少は社会全体の問題になっているように思います。

山根 昼間、母親と子どもだけの家庭になってしまうと言葉がいらなんでしょうし、二人だけでできる体験というのは非常に狭くなりがちなのではないでしょうか。そのために、本来コミュニケーションをとるために必要な子どもたちの言葉をなかなか養うことができず、コミュニケーションが希薄になってきているように思います。

鶴岡 確かに、最近の子どもたちは私生活での体験というのが非常に貧弱なものですから、なかなか子どもたち自身の本当の言葉が出てこない傾向にあり、コミュニケーションが難しくなっているかもしれません。そこでこのような問題意識から、家庭裁判所では、少年に、福祉施設での介護の手伝いや、地域の清掃活動への参加など、意図的に場面を設定して、いろいろな体験をしてもらおうという取組み、これを教育的措置というのですが、そのようなことも行っているんで



【やまね・もとよ】

山口県生まれ。1971年、NHKにアナウンサーとして入局。大阪放送局勤務を経て、東京のアナウンス室で「女性手帳」、「小さな旅」、「ラジオ深夜便」、「新日曜美術館」などを担当。女性アナウンサーの第一人者として活躍され、現在はNHKアナウンス室長として全国のNHKアナウンサーを纏める仕事をされている。

「ことばほどおいしいものはない」、「ことばで私を育てる」など、ことばをテーマとした多数の随筆やエッセーを執筆されている。

すよ。

山根 家庭裁判所でそこまでやっていらっしやるんですか。

鶴岡 そうなんです。そういう体験をすると、今までは悪いこととして申し訳なかったと言うだけだった子どもでも、言葉が増えて、自分は被害者にこんな苦しみを与えて申し訳なかったなどという被害者の立場に立った具体的な言葉が出てきたりするんです。それだけ体験の力というのは大きな力になるんですね。

山根 以前担当していた番組の中で出会った、日本全国の片隅に住んでいて、とてもすばらしい生き方をしている方々の言葉に、私はとても感動しました。本当に私の心に届く言葉というのは観念じゃない、生活に密着した多くの体験や、日常の積み重ねの中から本人が学びとった実体験に基づいて獲得した言葉だなということを感じましたね。

鶴岡 やはり、コミュニケーションに求められている相手の心に届く本当の言葉というのは、体験に根ざしていないと出てこないということでしょうね。

●「一アナウンサーから女性管理職へ」

鶴岡 山根さんは、昨年、女性としてはNHK初のアナウンス室長に就任されたということですが、現場を離れてしまって、寂しいと思われることはありませんか。

山根 自分でもびっくりするぐらい、全く未練がないんです。室長になった後しばらくは、現場と両方やっていたのですが、もう想像を絶する大変さだったものですから、去年の秋の時点で3月いっぱい番組を降りて行政職に専念しますと申し出た後は、もうこの3月が待ち遠しくて、待ち遠しくて(笑)。ただ、地方に出ているいろいろな町や村の人とゆっくり話をしたり、アーティストの方とじっくり話をしたりする機会がなくなったことは本当に残念ですね。

鶴岡 山根さんは、自分を切り替える力も人一倍お持ちなんですね。

山根 けれど、アナウンス室長になって初めて会議に出たときには、私は、耳が悪くなったのかしらと思ったんですよ。会議の中の言葉は、それまでに聞いたことがない語彙があつて、意味がわからなかったんです。

鶴岡 山根さんにとっては、いろいろな役割の人が参加する会議の中で、自分の企画なり意見を通す言葉というのは、インタビューの言葉とは別の言葉という感覚をお持ちですか。

山根 相手を大事に、自尊心を踏みにじらないように気を付けるという根底や、相手の心に届けなければならないという点では会議もインタビューと同じです。けれども、管理職として、会議やアナウンス室で話さなければならないのは、ある理念やリーダーとして組織を引っ張るための言葉であって、お互いに心通わせるためのインタビューの言葉と違って、双方向でない言葉なんですね。そこが私にとってつらいところです。

鶴岡 管理職になられた今、女性がいろいろなポストに就き、やりがいのある仕事を続けていくために、やらなければならないと考えていらっしゃることはおありですか。

山根 NHK全体の組織の中で言うと、女性はまだ1割をちょっと超えたばかりですから、男性と本当に対等の関係にはなっ

ていないんです。例えば、ニュースの取り上げ方一つにしても、それは男性の感覚なんじゃないかなと思うことがあるんです。ニュースの中核に女性を配置すると、ニュースの取扱い方にしても、男性だけの感覚とは微妙に違ってくると思いますから、女性にもっと決定権を与えて、女性の意識を生かしていくことが、放送局としても必要ではないかと思っています。

鶴岡 女性の数がどんどん増えることによって、裁判所でも企業でも、組織が新しく変わる、今はそういう大きな流れの時期なのかもしれませんね。

山根 そうですね。時代のうねりというのでしょうか。

鶴岡 そう考えると、やりがいのある時期に室長になられたのではありませんか。

山根 私は本当に、一専門職として、一アナウンサーとして定年まで現場で仕事することだけを望んできたんです。ですから、最初のうちは、何で私がアナウンス室長なのって、そういう戸惑いばかりでしたけれど、今はもうこの時代に私がた





またまなった、これは神様の思し召し、私のミッションなんだと思うことにしました。

●「後輩アナウンサーに 対することば」

鶴岡 著書の中で、後輩アナウンサーに対し、自分が苦しみ悩んだことを一から体験させないように伝えていきたいとおっしゃっていますが、後輩アナウンサーを育てるときにはどういうことを心掛けていらっしゃるのですか。

山根 アナウンスメントの専門性を身につけることは、もう言うまでもない第一条件です。これが身につけてなければアナウンサーとは言えません。それから、先ほども述べたことですが、番組力、この二つが必要です。この番組力を磨くためには、人間としての当たり前の感覚、言い換えれば、普通の生活感覚を持ち続けていくことが一番大事であると思っています。NHKのアナウンサーは、地域の放送局に赴任することもありますから、その先々で地元の人たちときちんと向き合うこと、自分の足で歩いて、いろいろ

な人に出会って、いろいろな暮らしを見てきなさいと言っています。私は、いろいろな人のいろいろな暮らしを見ておくことが、後々すごい財産になって物事を判断するときのよりどころになるんじゃないかと思うんです。そして、組織運営の方のポストに就いてしばらく現場を離れてもまた元の専門職としての一アナウンサーに戻れるという、専門職と行政職との間を行き来できるようなシステムをつくって、これまでとは違う、新しい生き方を探っていかなければやっていけないという話をしています。



鶴岡 若い人の受けとめ方はどうですか。アナウンサーとして入ったので、地方勤務や行政は経験したくない、専門性を磨きたいというように受けとめている方はいませんか。

山根 若い人は、常識というのか、当然のこのように受け止めています。

鶴岡 専門分野にこだわる人はいませんか。

山根 やはり、今までの時代を長く生きた人ほど難しいです。古きよき時代を知っている人ほど意識改革は難しいですね(笑)。

鶴岡 どこもよく似てますね(笑)。

●「さいごに」

鶴岡 今後、ご自分のお仕事については、どのようなビジョンをお持ちなのでしょう。

山根 私は、文化庁の国語審議委員として、今の日本の子どもたちの言葉を何とかしなければ、もう日本に明日はない、危機的な状況にあるんだということをさんざん話し合ってきました。日本の子どもの言葉教育に対して、一アナウンサーとして何かできることはないかと思っていたんですけど、余りにも非力で、できなかったんです。アナウンス室長というポストに就いた今は、まだ具体的ではありませんが、NHKアナウンサーにできる社会貢献ということで、事業を始められないかと思っています。幼年期に、いろいろな人と心地よいコミュニケーションをしておくという体験が、その子の脳の働きを成長させるという最近の脳生理学の発見を踏まえて、言葉によるコミュニケーションの力を子どもたちにつけるために、私たち全国500人のアナウンサーたちが今まで80年のNHKの歴史の中で積み重ねてきた言葉によるコミュニケーションの方法論を何とか番組に還元し、それを使って子どもたちと触れ合っていく、そういう仕事をしていきたいですね。

鶴岡 コミュニケーションの練習みたいなことを子どもたちと一緒にしようということですか。

山根 言葉によるコミュニケーションがこんなに楽しいんだ、人間と触れ合うことがこんなに心地よいことなんだということ幼いうちに体にしみこませておけば、人間に対する不信感みたいなものを持たないで、幸せな人生を生きることができるとじゃないかなと思っているんです。

鶴岡 それはいいお話をうかがいました。これまで多くの人と素敵な出会いをされ、人と人の言葉によるコミュニケーションの楽しさを社会に伝えてきた山根さんが、その経験とこれまでにNHKで培われてきた方法論を活かして、社会のため、子どもたちのために行動されようとしていることに、とても感銘を受けました。そのプログラムは是非成功させていただきたいものです。

本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

山根 ありがとうございます。



「正義」像前